テンション高いIS！

桜山　梨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

常にテンション高い山守　翔は色々しながら楽しむお話。

【注意】

テンション高くて現実に居たらまさにキチガイな主人公です。

主人公はテンション高いだけでなく、さらにさらに！とても強いという設定です。

目　次

テンション高い山守　翔はＩＳ学園にて大暴れ　―――――　1
第2話　―――――　4

テンション高い山守　翔はＩＳ学園にて大暴れ

はい！皆さんこんにちは俺は鐘森　翔！至って普通だった高校生！あれぇ？此処はどこだぁ？自問自答しちゃうぞぉ～！此処はＩＳ学園な・の・だ！（ドヤァ）俺はＩＳを動かせる男、二人目なのだ！
「じっ、自己紹介ぐらいしますから」
　およおよ一人目さんが自己紹介を始めようとしているゾ。
「えっと……織斑一夏です。」
　えっ?!もっとなんかないのぉ～。
「お前はろくに自己紹介も出来んのか」
「ス、スルト！」
「誰が北欧神話の巨人だ、馬鹿者。」
　バコン！
「痛てぇー！」
　俺、出席簿の新しい使い方を覚えたぜ！
「千冬様～」「あなたのためなら死ねます～」
「あ～、何故毎年こんな馬鹿共が居るんだ？次、鐘森。お前はしっかりと自己紹介しろ。」
　え～、そう言われたらしたくなくなるじゃん！真面目にやーらない！それじゃあこんなんでどうだ！
「ワタシは魔女教、大罪司教ーー『怠惰』担当、〇テルギウス・ロマネコンティ……デス！」
「「ワハハハハ～」」
　良し！ウケた！わぁーい、わぁーい。でも全員じゃないな。知らないのか。
　先生は？
『ぷち』
　なんの音ぉ？ここは
「あー！水素の音～」
「「ぷっ」」
　何故かみんな笑いを堪えようとしているみたいだけど滑らなくて

よかったぁー。
『ゴゴゴゴゴ…、』
ん？
「お前はろくに自己紹介が出来んのか!!」
バコン
痛ぁーいよぉ。まさに
「脳が震える震える～」
「「ウワハハハハ～!!」」
イエーイ
「お前は懲りん様だな」
パシ
「流石に2回目はきついですよ～」
俺は手で出席簿を受け止めた。いや、凄いね出席簿。
「ありゃ～威力強すぎてちょっと手の皮剥けて血出ちゃってるよ。あはは、あはは。」
なかなか驚いた顔をしてるねぇ～皆さん。
「僕ちんきちんと2度目は学ぶ子なのさ～」
「「いや、じゃあさっきも真面目にしろよ!!」」
あれれれ？
「お前は放課後教室に残れ。」
うわぁ～、怒られちゃうのかなぁ、それとも
「告白ですかぁ？」
「んな訳あるか阿呆！」
バコン

危ない危ない、3度目だぁ～。手で止めるのはさっき痛かったから避けたんだけど……。
ミシミシミシ……バキ
「先生。加減してくださいな、加減。」
「もう良い。山田先生、すみませんが机新しい物に後で取り替えてください。」

キーンコーンカーンコーン
「あ～休み時間だ！」
教室の中歩いてみよう、誰か話してくれるかなぁ～。
「まだ挨拶をしとらん!!席に戻れ!!」
■□■□■
「困ったちゃんになっちったヨウ！みんなが滅茶苦茶話しかけてくるんだヨウ！俺っぱもしかして人気者になったのかヨウ！いやぁ、照れますねぇだヨウ！」
「いや、そんなんじゃないんだヨウ！」
みんな乗ってくれた～
「ありがとヨウ！」
「へイヨウ！」

第2話

やぁ、こんにちは！敬愛なる俺の信徒たち！
えっ？そんなものいないってぇ？今から作るのさ。歴史は常に塗り替えられる。
（本人いいこと言ったつもりです。）
「イチカ、チョットハナシガアルンダガイイカ」
「ホウキカ！ヒサシブリダナ」
どうやら俺の前の一夏くんは幼馴染と喋っているらしい。おっ？教室から出ていく。尾行でもしよっかな？
「……っと！」
「ん？俺のファン28号？」
「その28という数字はどこからでてくるんですの?!それに『ファンか？』なんて！……。ち、が、い、ますわ！ちょっと！聞いてますの！」
「聞いてない。そーゆーの要らないんで、ハイ」
声をする方をすら見ずに返事をする。教室の端から椅子からズテッと転ぶ音。音のなった方に振り向こうとしたら視界にチョココルネが映る。何これ？（ゴロリ的表現）
作った人には悪いけど正直言って…
「不味そう」
「な～に～がですの?!さっきからあなたは奇怪なこうどうばかり！どうして男というものは…、」
「いやだって何このチョココルネ。艶々しすぎ、髪の毛みたい。いや、チョコがないからもうこれはチョココルネではないな！（名推理）」
完結したところで（自分の中ではの話）さらなるネタを探そう！
「あ、あなた。わ、私の髪の事を言っているのですか?!」
「いやいや、チョココルネに対してですけど？」
「？」
「？」
「会話が、噛み合わないだ、と?!」

やっと会話をしている相手の顔をみる翔。
「あ～納得納得。セシリアさんはチョココルネなフレンズなんだね！（ゴリ押し）」
「「いや、それ理解してないから。チョココルネなってどんなんだよ……って髪型か」」
「みんな、台本持ってんの？何回練習したの」
「「してない。私達はただ流れに乗るだけ……」」
ふぅーん？ＩＳ学園だしね！
「いつかきっと　できるよねしんじていれば　できるよね　おねがい　きっとだよ　まってまーす！」
「それ関係ない…。えっ?!私一人だけ？なんで?!神よ！私を見放されたのですか？何故です！」
暫しの沈黙。はぁ、この空気、破らないといけないよね！
作者「誰も頼んでないンゴ……」
「君は空気読めない系のフレンズなのかな？」
「「あんただけには言われたくないでしょう（言われたくない）」」
なぜだろう、このやり取りが楽しい。
「やめられない、止まらない！かっぱエビせ○」
「「隠すとこ違う！」」
それにしても
「この会話って誰が発端だったっけ？」
「「知らんな。」」
「ｏｈ……」
「私……、空気ですの？」
一同「「ごめん、忘れてた」」